

# 「金沢市民スポーツ基本調査」報告書

令和3年9月 実施

速報版

金沢大学スポーツ社会学研究室

代表 人間社会研究域教授 佐川哲也

# 金沢市民スポーツ基本調査概要

## 1. 調査目的

金沢市は、「金沢市スポーツ推進計画」の中間見直しに当たり、令和3年現在の市民のスポーツ実施状況等について調査し、これまでのスポーツ振興策の成果を評価するとともに、金沢市が取り組むスポーツ政策について広く市民の意見を聞き、金沢市のスポーツ振興に役立つ資料を作成することを目的とした。

## 2. 調査内容

- (1) 運動・スポーツ実施状況：実施の有無，実施種目，実施頻度，実施時間，運動強度，経費
- (2) 運動・スポーツ施設：利用施設，利用施設タイプ，施設までの所要時間，建設希望施設
- (3) 運動・スポーツへの取り組み：実施効果，実施理由，非実施理由，満足度
- (4) スポーツ関連活動頻度：観戦(テレビ，インターネット，競技場，ラジオ)，家族や知り合いの応援に行く，地元プロスポーツチームの応援に行く，雑誌や新聞を読む，家族や仲間と話す，スポーツウェアを着る，スポーツ目的の旅行をする，指導や審判する，スポーツクラブや団体を運営する，スポーツ大会やイベントを運営する，サッカーくじを買う，競馬・競艇など
- (5) スポーツクラブ・フィットネスクラブへの加入状況：加入クラブ・チームの種類
- (6) スポーツイベントへの参加：イベント主催者ごとの参加の有無
- (7) スポーツ条例・計画の認知度：金沢市スポーツ文化推進条例，金沢市スポーツ推進計画
- (8) 地元プロスポーツチームの応援・観戦：チーム別
- (9) 金沢マラソンへの関わり：これまでの関わり方，今後の関わり方
- (10) コロナ禍におけるスポーツ実施状況：生活の変化，スポーツ実施の変化，感染予防対策など
- (11) 東京2020オリンピック・パラリンピックへの関わり：関わり方，受けた影響
- (12) 運動・スポーツ情報：必要とする運動スポーツ情報，情報源
- (13) 子どものスポーツについて：子どものスポーツにおいて重要なこと
- (14) スポーツに参加しづらい人への配慮：重要と考えること
- (15) 日常生活習慣：健康維持・増進のための身体活動の実施，自己の体力評価，朝食摂取の有無，バランスの良い栄養摂取への留意，喫煙の状況，飲酒の状況，睡眠の状況
- (16) 個人的属性：年齢，性別，職業，住居地域

## 3. 調査対象

- (1) 母集団：金沢市に居住する満20歳以上80歳未満の男女(333.6千人)
- (2) 標本数：5,000人
- (3) 地点数：金沢市小学校下の全地点
- (4) 抽出方法：層化二段無作為抽出法

4. 調査時期 令和3年9月20日 ～ 10月10日

5. 調査方法 郵送による質問紙調査(オンラインによる回答を含む)

6. 回収結果	郵送による回収数	1,658	有効回収数	1,557
	オンライン回答数	268	有効回答数	268
	合計回収数(回収率)	1,926(38.5%)	有効回答数	1,825(36.5%)

## 7. 調査報告書の作成

この調査は、金沢大学スポーツ学研究室(代表：人間社会研究域教授 佐川哲也)が受託し、金沢市スポーツ推進計画中間見直し作業部会において作成した調査票を配票・回収ののち、集計・分析を行って報告書を作成した。

# I 調査結果の概要

## 0. 回答者の属性

表1は、回答者の属性を示している。

有効回答者1,825名（有効回答率36.5%）のうち、性別および年齢が正しく記載されていた者は1,731名であった。

その内訳は男性が734名（42.4%）、女性が997（57.6%）であり、女性の割合が高くなった。年代別にみると、60代が最も高く24.4%、次いで70代が24.1%、50代が16.1%であった。20代は最も低く、全回答者の9.4%であった。すべての年代で女性の割合が高くなっていた。

表1. 回答者の属性

		20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計
男性	度数	61	80	101	97	189	206	734
	%	37.4	39.0	41.1	34.9	44.8	49.4	42.4
女性	度数	102	125	145	181	233	211	997
	%	62.6	61.0	58.9	65.1	55.2	50.6	57.6
全体	度数	163	205	246	278	422	417	1,731
	%	9.4	11.8	14.2	16.1	24.4	24.1	100.0

# 1. ベスト3「散歩」「ウォーキング」「体操」は変わらずも、実施率減少

表2は、種目別にみた一年1回以上の運動スポーツ実施率及び推計人口を表している。

最もよく実施していた運動スポーツは「散歩（ぶらぶら歩き）」で32.2%であった。これを調査時点の20歳以上人口333.6千人で推計すると107.3千人に相当する。第2位は「ウォーキング」で23.1%の76.9千人、第3位は「体操（軽い体操・ラジオ体操など）」で20.4%の68.2千人であった。2009年および2014年調査と比較すると、上位3種目の順位に変動はなかった。

「運動スポーツを実施しなかった」者に注目すると、32.7%すなわち109.1千人がこの1年間に運動スポーツを実施しておらず、2014年と比較すると7.0ポイント減少した。新型コロナウイルス感染症の影響が、運動スポーツ実施率とその推計人口に表れる結果となった。

2014年からの実施率の変化に注目すると、増加した種目は「筋力トレーニング」だけであり、僅かに0.7ポイント増加したが、人口減少により推計人口は僅かに減少した。その他すべての種目で実施率及び推計人口が低下した。「ウォーキング」では9.6ポイント、「ボウリング」が7.2ポイント、「サイクリング・自転車」が4.9ポイント、「体操（軽い体操・ラジオ体操）」が3.5ポイント、「グラウンドゴルフ」が3.4ポイント減少した。

表2. 種目別にみた運動スポーツ実施率及び推計人口（2014・2009調査と比較）

2021 全体 ( n=1,825 )				2014 全体 ( n=1,868 )			2009 全体 ( n=1,127 )		
順位	実施種目	実施率	推計人口	順位	実施率	推計人口	順位	実施率	推計人口
		(%)	(千人)		(%)	(千人)		(%)	(千人)
1	散歩（ぶらぶら歩き）	32.2	107.3	1	34.3	126.3	1	36.1	129.6
2	ウォーキング	23.1	76.9	2	32.7	120.5	2	22.9	82.2
3	体操（軽い体操・ラジオ体操）	20.4	68.2	3	23.9	87.9	3	18.9	67.9
4	筋力トレーニング	13.7	45.7	4	13.0	47.8	5	13.0	46.8
5	ストレッチ	12.5	41.7	-	-	-	-	-	-
6	サイクリング・自転車	7.3	24.2	5	12.2	45	4	13.2	47.5
7	ジョギング・ランニング	7.1	23.6	7	8.8	32.4	8	10.1	36.3
8	ゴルフ（コース）	6.2	20.7	10	7	25.7	10	8.6	30.9
9	ゴルフ（練習場）	5.9	19.6	13	5.9	21.6	9	8.9	31.9
10	ヨガ・ラフターヨガ	5.2	17.5	11	6.6	24.2	16	5.5	19.7
11	水泳	4.3	14.4	8	7.1	26.1	7	11.0	39.5
	登山・トレッキング	4.3	14.4	8	7.1	26.3	14	6.5	23.3
13	ボウリング	4.1	13.8	6	11.3	41.7	6	12.6	45.2
	釣り	4.1	13.6	14	5.8	21.4	12	8.0	28.7
15	卓球	3.0	10.0	18	3.9	14.4	17	5.1	18.2
16	グラウンドゴルフ	2.7	8.9	12	6.1	22.4	21	4.1	14.7
17	バドミントン	2.6	8.7	17	4.0	14.8	15	5.6	20.1
18	キャッチボール	2.5	8.4	20	3.7	13.6	13	7.1	25.5
19	なわとび	2.1	7.1	26	2.1	7.8	28	2.6	9.3
20	スキー	1.8	6.0	15	4.5	16.4	17	5.1	18.5
	スノーボード	1.8	6.0	26	2.1	7.8	28	2.6	9.3
	ハイキング	1.8	6.0	22	2.8	10.3	19	4.9	17.6
23	エアロビックダンス	1.7	5.8	19	3.8	14.0	24	3.1	11.1
	アクアエクササイズ	1.7	5.6	25	2.7	9.9	20	4.7	16.9
25	エアロバイク	1.6	5.3	-	-	-	-	-	-
	海水浴	1.6	5.3	16	4.1	15.0	11	8.3	29.9
	ピラティス	1.6	5.3	-	-	-	-	-	-
	テニス（硬式テニス）	1.6	5.3	28	2	7.4	25	3	10.8
29	キャンプ	1.5	5.1	29	1.9	7	33	2.1	7.5
	ダンス（社交ダンスなど）	1.5	5.1	22	2.8	10.3	23	3.2	11.5
	この一年間に運動スポーツを行わなかった	32.7	109.1		25.7	94.5			29.7

表3は2021年調査におけるこの1年間に実施した運動スポーツ種目のうち上位5種目を年代別に表したものである。表4は2014年調査、表5は2009年調査の結果を示している。

2021年度は、すべての年代で「散歩（ぶらぶら歩き）」が第1位となり、50年代から70年代で「ウォーキング」との順位が入れ替わった。2014年には高年代で「ウォーキング」の実施率が上昇し、運動がアクティブになったと分析したが、高年代の「ウォーキング」実施が消極的になったと解釈される。第2位では、20代と30代では「筋力トレーニング」「ストレッチ」、40代以上では「ウォーキング」となり。その実施率も低くなっている。第3位では、50代以上では「体操」がリストされたが、40代では「ストレッチ」、20代では「ウォーキング」となった。

表3. 年代別にみた運動スポーツの実施種目2021

順位	20代	30代	40代	50代	60代	70代
1	散歩(ぶらぶら歩き)(32.3)	散歩(ぶらぶら歩き)(32.7)	散歩(ぶらぶら歩き)(27.8)	散歩(ぶらぶら歩き)(31.5)	散歩(ぶらぶら歩き)(32.9)	散歩(ぶらぶら歩き)(33.7)
2	筋力トレーニング(25.0)	筋力トレーニング(19.5)	ウォーキング(27.6)	ウォーキング(21.5)	ウォーキング(25.8)	ウォーキング(28.0)
3	ウォーキング(18.3)	ストレッチ(19.5)	ストレッチ(17.7)	体操(19.7)	体操(24.3)	体操(26.3)
4	ジョギング・ランニング(14.6)	ウォーキング(19.0)	体操(17.7)	ストレッチ(15.4)	ストレッチ(11.3)	筋力トレーニング(9.6)
5	ストレッチ(14.0)	体操(16.1)	筋力トレーニング(13.3)	筋力トレーニング(15.1)	筋力トレーニング(11.1)	グラウンドゴルフ(8.6)

表4. 年代別にみた運動スポーツの実施種目2014

順位	20代	30代	40代	50代	60代	70代
1	散歩(ぶらぶら歩き)(32.9)	散歩(ぶらぶら歩き)(31.1)	散歩(ぶらぶら歩き)(33.6)	ウォーキング(32.1)	ウォーキング(41.4)	ウォーキング(37.3)
2	ウォーキング(24.7)	ウォーキング(21.8)	ウォーキング(27.6)	散歩(ぶらぶら歩き)(31.6)	散歩(ぶらぶら歩き)(37.1)	散歩(ぶらぶら歩き)(36.8)
3	ジョギング・ランニング(23.4)	体操(21.8)	体操(23.6)	体操(23.6)	体操(27.9)	体操(26.2)
4	筋力トレーニング(20.9)	筋力トレーニング(19.6)	サイクリング・自転車(117.6)	ボウリング(11.4)	筋力トレーニング(11.9)	グラウンドゴルフ(14.3)
5	ボウリング(19.6)	サイクリング・自転車(17.3)	ボウリング(15.2)	サイクリング・自転車(10.8)	登山・トレッキング(11.4)	筋力トレーニング(9.3)

表5. 年代別にみた運動スポーツの実施種目2009

順位	20代	30代	40代	50代	60代	70代
1	散歩(ぶらぶら歩き)(40.2)	散歩(ぶらぶら歩き)(41.1)	散歩(ぶらぶら歩き)(33.2)	散歩(ぶらぶら歩き)(31.2)	散歩(ぶらぶら歩き)(42.6)	散歩(ぶらぶら歩き)(29.2)
2	筋力トレーニング(28.0)	筋力トレーニング(19.0)	ボウリング(18.7)	ウォーキング(23.9)	ウォーキング(33.0)	ウォーキング(20.8)
3	ボウリング(27.3)	サイクリング・自転車(17.9)	体操(17.6)	体操(16.1)	体操(23.9)	体操(18.2)
4	ウォーキング(26.5)	体操(16.7)	ウォーキング(16.6)	サイクリング・自転車(11.5)	サイクリング・自転車(13.5)	グラウンドゴルフ(8.3)
5	海水浴(24.2)	ボウリング(16.7)	サイクリング・自転車(15.5)	ボウリング(11.0)	登山・トレッキング(13.5)	ダンス(7.3)

## 2. コロナ以前より低下した運動スポーツ実施率は、46.5%

図1は、金沢市民がこの1年間に実施した運動スポーツ種目のうち、回答者が最もよく実施したと回答した種目について、全体、男女別、年代別にその実施レベルを表している。また、表6は、「週1回以上」運動スポーツを実施した（レベル1bからレベル4までの合計）者の7年及び12年の割合変化を示している。

金沢市民が「週1回以上」運動スポーツを実施した割合は46.5%であり、国が2000年のスポーツ振興基本計画で目標値として示した「2人に1人」の割合を再び割り込む結果となった。男女別では、男子が44.4%、女子が48.0%であり、男女とも目標値の50%より低くなった。

年代別にみると、70代の割合が最も高く54.6%と50%を超えたが、それ以外はすべて50%以下であった。60代は48.9%、20代が44.5%、50代が44.4%、40代が43.3%、30代が42.4%であった。

表6は、調査年の間の変化を表している。過去最も実施率が高かった2014年からの7年間では、全体、男女及びすべての年代で実施割合が低下した。全体では、2014年調査と比較して6.1ポイント低下した。男性では9.3ポイント低下し、60代でも8.0ポイント、30代では7.8ポイント低下した。唯一50%を維持できた70代では、低下は2.1ポイントにとどまった。

2009年と比較する時、40歳であった者は52歳になっており、この間の変化は年代の移動を意味する。この変化に注目すると、60代は12年前の50代と比較して0.9とわずかに上昇している。しかし、70代では2.3ポイント、50代では5.0ポイント、40代は6.9ポイント、30代では7.3ポイントと減少した。退職期を迎えた60代はわずか0.9ポイントの低下であるが、それ以外の年代では大きく低下していることから、この間に発生した新型コロナウイルス感染症が市民の運動スポーツ実施に大きな影響を与えたことが示唆される。しかし、2021年10月現在の状況では、実施率がここまで回復してきたと解釈することもできよう。

金沢市スポーツ推進計画の目標値は65%であったことを確認するなら、2021年秋の結果は遠く及ばない結果であり、むしろ前回調査から後退する結果であった。どのように金沢市民が運動スポーツに親しむ生活を取り戻すことができるか、新型コロナウイルスへの感染症対策を含めて、市をあげてしっかりと議論をおこない、市民が安心してスポーツ親しむことができる新しい生活様式と基準を提案することが求められる。

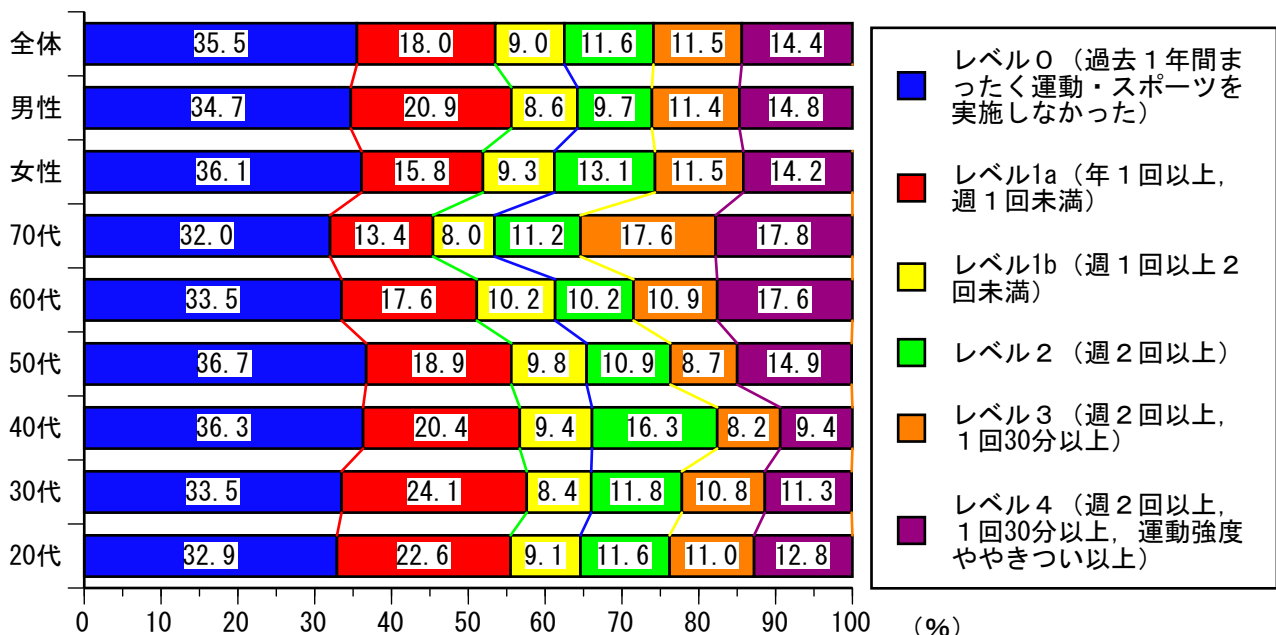


図1. 性別・年代別にみた運動スポーツの実施レベル (2021)

表6. 週1回以上実施した者の割合の比較

	全体	男性	女性	20代	30代	40代	50代	60代	70代
2021年	46.5	44.4	48.0	44.5	42.4	43.3	44.4	48.9	54.6
2014年	52.6	53.7	51.7	49.7	50.2	49.4	48.0	56.9	56.7
2009年	49.2	48.2	50.0	52.3	52.7	40.6	46.2	54.5	48.4
2014→2021	-6.1	-9.3	-3.7	-5.2	-7.8	-6.1	-3.6	-8.0	-2.1
2009→2021	-2.7	-3.8	-2.0	-7.8	-10.3	2.7	-1.8	-5.6	6.2
年代間の変化				-	-7.3	-6.9	-5.0	0.9	-2.3

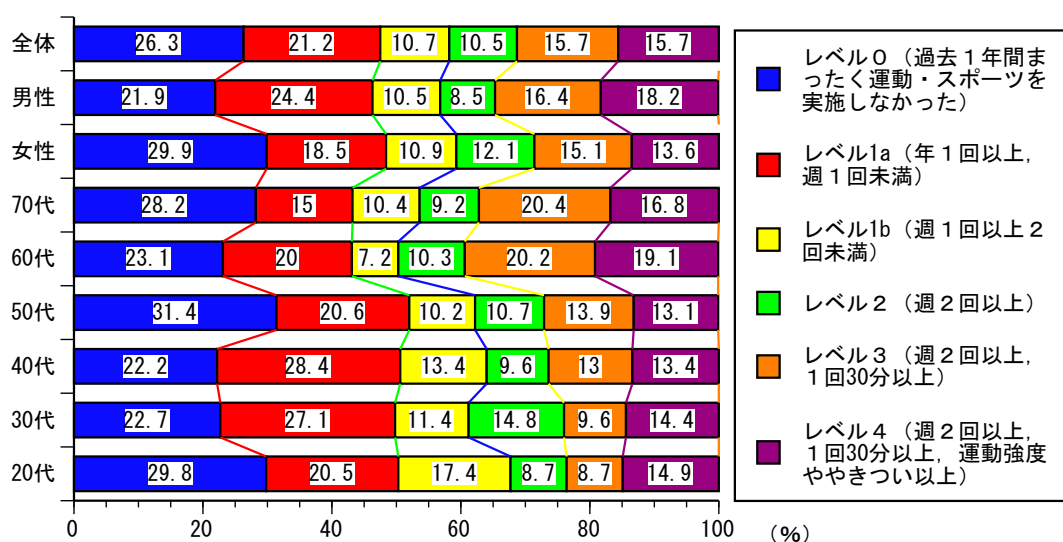


図2. 性別・年代別にみた運動スポーツの実施レベル (2014)

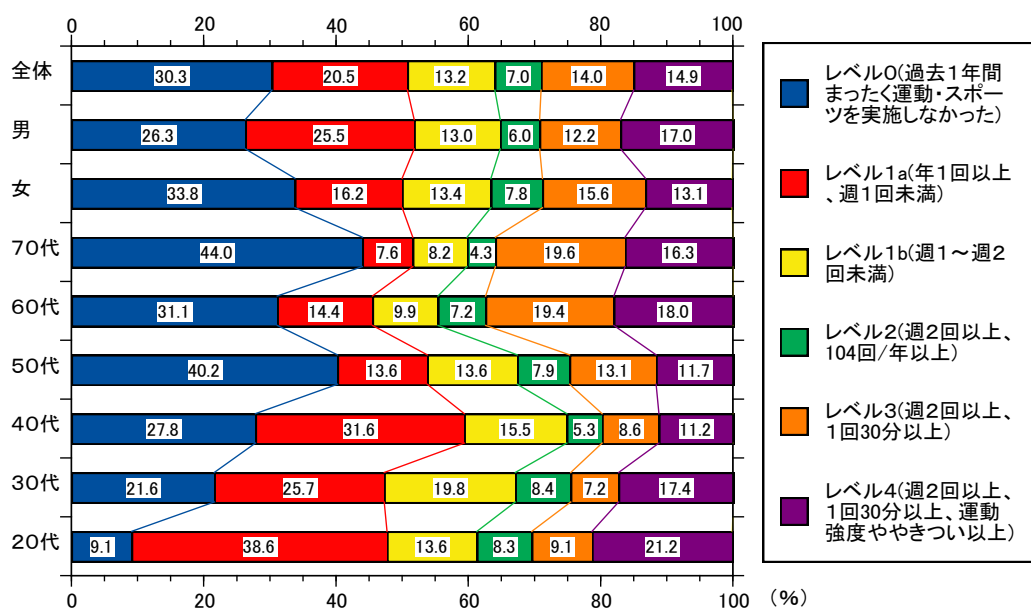


図3. 性別・年代別にみた運動スポーツの実施レベル (2009)

### 3. 運動スポーツの実施が「身体の調子」を回復させている

表7は、運動スポーツ実施後に感じる効果について年代別に表している。表8は、2014年調査の結果を示している。

20代と30代では「ぐっすり寝られた」が、50代と70代では「身体の調子が良くなった」が、30代では「美味しく食事ができた」が、「50代では気持ちが落ち着いた」が第1位となった。

2014年調査では、運動スポーツの実施が「睡眠」と「食事」を促進することが示唆されたが、今回は「身体の調子が良くなった」に注目して分析したい。今回の調査では、2014年調査と比較して、ほぼすべての年代において「身体の調子が良くなった」の値が上昇し、順位も上昇する傾向が確認される。金沢市民はコロナ禍において運動不足やストレスを感じやすくなっており、運動スポーツの実施が身体の調子を改善することかを実感している結果であると推察される。

表7. 年代別にみた運動スポーツ実施後に感じる効果2021（複数回答）

順位	20代	30代	40代	50代	60代	70代
1	ぐっすり寝られた (52.3)	ぐっすり寝られた (45.9)	美味しく食事ができた (44.2)	身体の調子がよくなった (43.3)	気持ちが落ち着いた (45.9)	身体の調子がよくなった (48.9)
2	気分がリフレッシュした (47.7)	美味しく食事ができた (43.7)	身体の調子がよくなった (39.1)	ぐっすり寝られた (40.4)	美味しく食事ができた (37.3)	気持ちが落ち着いた (45.7)
3	美味しく食事ができた (45.0)	気分がリフレッシュした (41.5)	気持ちが落ち着いた (39.1)	気分がリフレッシュした (39.9)	身体の調子がよくなった (36.9)	ぐっすり寝られた (36.3)
4	身体の調子がよくなった (39.6)	身体の調子がよくなった (31.9)	ぐっすり寝られた (37.8)	新陳代謝が高進した (35.4)	ぐっすり寝られた (34.4)	美味しく食事ができた (36.0)
5	笑って親密さが深まった (36.9)	気持ちが落ち着いた (31.9)	気分がリフレッシュした (37.2)	気持ちが落ち着いた (34.3)	気分がリフレッシュした (34.1)	笑って親密さが深まった (34.9)

表8. 年代別にみた運動スポーツ実施後に感じる効果2014（複数回答）

順位	20代	30代	40代	50代	60代	70代
1	ぐっすり寝られた (54.5)	ぐっすり寝られた (48.8)	ぐっすり寝られた (41.4)	ぐっすり寝られた (39.9)	気持ちが落ち着いた (47.3)	美味しく食事ができた (49.3)
2	気分がリフレッシュした (52.7)	気分がリフレッシュした (46.5)	美味しく食事ができた (39.9)	新陳代謝が高進した (38.7)	ぐっすり寝られた (42.3)	身体の調子がよくなった (48.9)
3	美味しく食事ができた (50.0)	美味しく食事ができた (42.4)	気分がリフレッシュした (39.4)	気持ちが落ち着いた (38.3)	身体の調子がよくなった (37.8)	笑って親密さが深まった (47.1)
4	笑って親密さが深まった (38.2)	気持ちが落ち着いた (31.4)	気持ちが落ち着いた (35.0)	身体の調子がよくなった (37.2)	笑って親密さが深まった (37.5)	ぐっすり寝られた (45.7)
5	だんだん上達してきた (27.3)	身体の調子がよくなった (31.4)	身体の調子がよくなった (30.5)	気分がリフレッシュした (36.4)	美味しく食事ができた (37.5)	気持ちが落ち着いた (43.8)



#### 4. 運動スポーツを「健康のため」に実施する傾向が強まる

表9は、運動スポーツの実施理由のベスト5を年代別に表している。表10は2014年調査の結果を示している。

すべての年代で「健康のため」が第1位となった。第2位では、20代、40代、60代、70代で「運動不足解消のため」が第2位となった。30代では「気晴らしや気分転換のため」、50代では「体力の維持増進」であった。

2014年と比較すると、20代と30代は「健康のため」の回答者の割合増加によって、第1位となった。このことから、若年代においても「健康」というキーワードに強く反応する傾向が示唆され、新型コロナの影響と解釈することができるかもしれない。いずれにしても、金沢市民の運動スポーツ実施理由は、生理的欲求の充足がその中心であり、新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、その傾向が強くなっていると解釈される。

表9. 年代別にみた運動スポーツの実施理由2021（複数回答）

順位	20代	30代	40代	50代	60代	70代
1	健康のため (63.1)	健康のため (64.5)	健康のため (66.7)	健康のため (77.1)	健康のため (75.7)	健康のため (83.2)
2	運動不足解消のため (59.5)	気晴らしや気分転換のため (61.6)	運動不足解消のため (56.6)	体力の維持増進のため (62.6)	運動不足解消のため (57.0)	運動不足解消のため (63.6)
3	気晴らしや気分転換のため (57.7)	運動不足解消のため (60.1)	体力の維持増進のため (51.6)	運動不足解消のため (59.8)	体力の維持増進のため (56.3)	体力の維持増進のため (58.7)
4	体力の維持増進のため (55.0)	体力の維持増進のため (47.7)	ストレス解消のため (40.3)	気晴らしや気分転換のため (46.9)	老化防止のため (48.2)	老化防止のため (54.9)
5	ストレス解消のため (45.9)	ストレス解消のため (44.9)	気晴らしや気分転換のため (39.6)	ストレス解消のため (38.5)	気晴らしや気分転換のため (42.3)	気晴らしや気分転換のため (37.1)

表10. 年代別にみた運動スポーツの実施理由2014（複数回答）

順位	20代	30代	40代	50代	60代	70代
1	気晴らしや気分転換のため (62.5)	運動不足解消のため (58.3)	健康のため (60.0)	健康のため (69.6)	健康のため (76.9)	健康のため (88.8)
2	健康のため (51.8)	健康のため (57.7)	運動不足解消のため (58.0)	運動不足解消のため (55.8)	運動不足解消のため (59.9)	運動不足解消のため (67.4)
3	運動不足解消 (50.9)	気晴らしや気分転換のため (52.0)	体力の維持増進のため (42.9)	体力の維持増進のため (42.7)	体力の維持増進のため (54.7)	老化防止のため (67.4)
4	体力の維持増進のため (40.2)	体力の維持増進のため (50.9)	気晴らしや気分転換のため (41.0)	ストレス解消のため (42.7)	老化防止のため (50.6)	体力の維持増進のため (52.6)
5	ストレス解消のため (37.5)	ストレス解消のため (36.6)	ストレス解消のため (32.2)	体力の維持増進のため (38.8)	気晴らしや気分転換のため (42.1)	友人との交流やコミュニケーション (35.1)

## 5. 「新型コロナウイルスの感染を予防するため」が運動スポーツ非実施理由に

表11は、運度・スポーツの非実施理由のベスト5を年代別に表している。表12は、2014年の結果を示している。

30代から60代では「仕事が忙しくて時間がないため」が最も高い割合を示した。この傾向はコロナ禍においても変わらないことが明らかとなった。70代の第1位が「高齢のため」であることも変わらない傾向である。20代では「仕事が忙しくて時間がないため」の割合が低下したことにより、「機会がないため」が第1位となった。20代に注目すれば、「仕事忙しいわけではないが運動スポーツをする機会がないため、実施できていない」と解釈されよう。

40代を除いて「新型コロナウイルスの感染を予防するため」がベスト5までにランクインしており、運動スポーツの非実施に影響を与えていることが明らかとなった。

表11. 年代別にみた運動スポーツの非実施理由2021（複数回答）

順位	20代	30代	40代	50代	60代	70代
1	機会がないため (46.0)	仕事が忙しくて時間がないため (43.3)	仕事が忙しくて時間がないため (50.6)	仕事が忙しくて時間がないため (38.8)	仕事が忙しくて時間がないため (31.7)	高齢のため (54.6)
2	やる気がない、面倒くさいため (34.0)	機会がないため (35.8)	やる気がない、面倒くさいため (35.3)	機会がないため (36.7)	コロナ感染予防のため (24.5)	体調不良または病気のため (28.5)
3	仕事が忙しくて時間がないため (32.0)	コロナ感染予防のため (32.8)	機会がないため (29.4)	やる気がない、面倒くさいため (35.7)	機会がないため (23.7)	生活の中で自然にやっているため (28.5)
4	疲れやすい、体力がないため (26.0)	やる気がない、面倒くさいため (31.3)	好きでない、興味がないため (23.5)	コロナ感染予防のため (26.5)	やる気がない、面倒くさいため (23.7)	疲れやすい、体力がないため (21.5)
5	好きでない、興味がないため/コロナ感染予防のため (24.0)	疲れやすい、体力がないため/仲間がいないため (20.9)	家事育児が忙しくて時間がないため (22.4)	疲れやすい、体力がないため (25.5)	生活の中で自然にやっているため (19.4)	コロナ感染予防のため (20.8)

表12. 年代別にみた運動スポーツの非実施理由2014（複数回答）

順位	20代	30代	40代	50代	60代	70代
1	仕事が忙しくて時間がないため (62.0)	仕事が忙しくて時間がないため (49.1)	仕事が忙しくて時間がないため (61.7)	仕事が忙しくて時間がないため (53.0)	仕事が忙しくて時間がないため (36.4)	高齢のため (49.1)
2	機会がないため (50.0)	機会がないため (37.7)	機会がないため (35.0)	機会がないため (29.1)	体調不良または病気のため (21.5)	生活の中で自然にやっているため (32.1)
3	仲間がいないため (44.0)	家事育児が忙しくて時間がないため (35.8)	お金がかかるため (35.0)	疲れやすい、体力がないため (23.9)	機会がないため (19.6)	体調不良または病気のため (27.7)
4	やる気がない、面倒くさいため (42.0)	やる気がない、面倒くさいため (32.1)	疲れやすい、体力がないため (28.3)	お金がかかるため (23.1)	やる気がない、面倒くさいため (19.6)	疲れやすい、体力がないため (21.4)
5	疲れやすい、体力がないため (36.0)	お金がかかるため (30.2)	家事育児が忙しくて時間がない/やる気がない、面倒くさいため (25.0)	やる気がない、面倒くさいため (19.7)	生活の中で自然にやっているため (19.6)	運動・スポーツ以外のことをしているため (19.6)

## 6. 顕著に低下したスポーツライフの満足度

図4は、スポーツライフの満足度を、図5は、調査年の変化を全体について比較している。

「満足している」者の割合が21.2%であるのに対して、「満足していない」者の割合が28.6%であり、満足していない者の割合が高くなった。男性では「満足している」者の割合が24.5%、女性では18.7%であり、女性のほうが「満足していない」者の割合が高くなった。

年代別にみると、「満足している」者の割合は70代が最も高く28.2%、次いで20代が22.1%であった。40代が17.3%と最も低いが、30代から60代はほぼ同じである。過去の結果では、「満足している」者の値が20代から40代に向かって減少し、その後は年代とともに上昇したが、変化は緩やかながら、概ね同様の傾向が確認できる。

「満足している」者の割合は2014年から顕著に減少し、「満足していない」者はやや増加した。これは新型コロナウイルス感染症の影響であると推察され、感染防止を最優先としてスポーツ活動を停止または減少させたことの影響であると思われる。「どちらともいえない」と回答した者の多さも、複雑な気持ちを反映しているかもしれない。

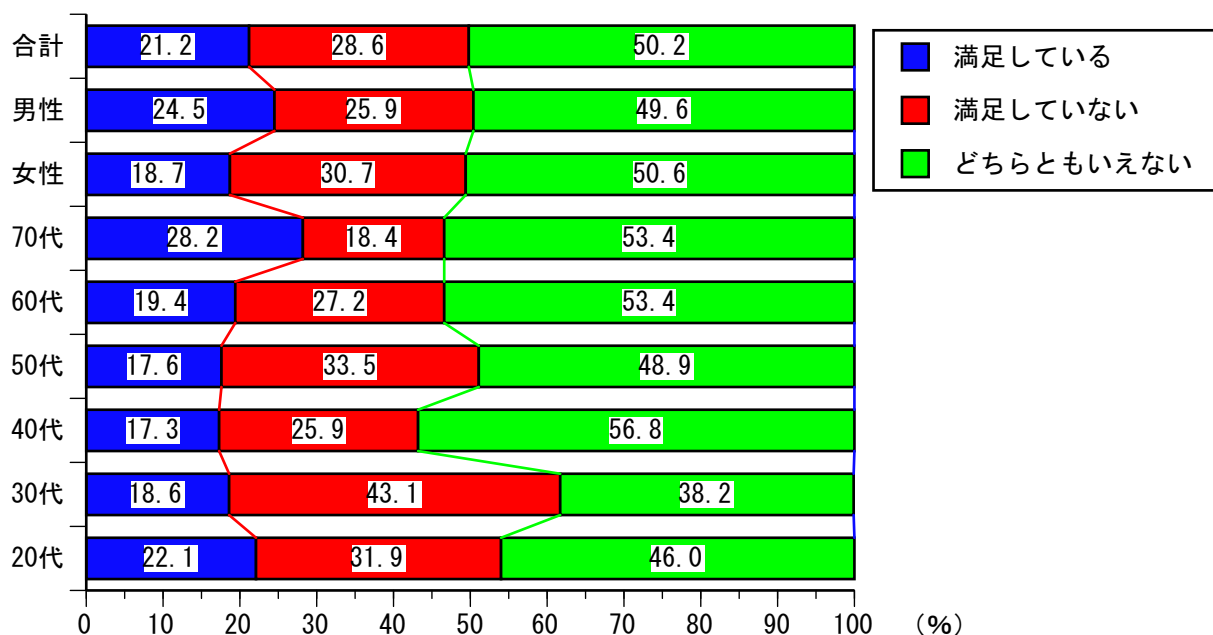


図4. スポーツライフの満足度 (2021)

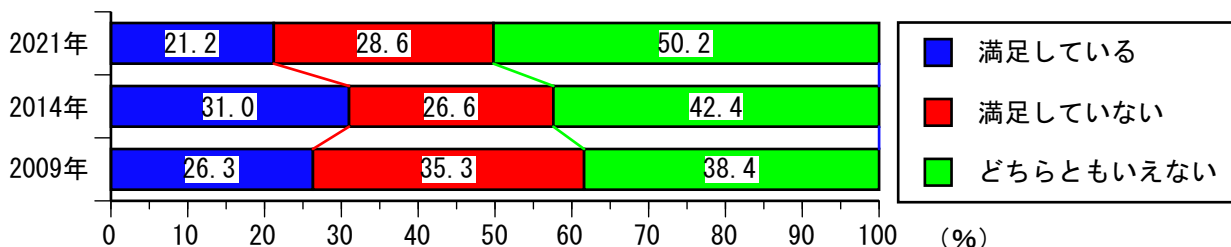


図5. スポーツライフの (全体) の調査年比較

## 7. 認知度は高くなっているが、観戦率がまだまだ低いプロスポーツチーム応援

図6は、プロスポーツチームの認知率と観戦率を示している。

観戦の経験の有無を問わない認知率に注目すると「ツエーゲン金沢」が最も高く95.7%、次いで「石川ミリオンスタース」が91.6%、「金沢サムライズ」が80.1%、「北國銀行Honey Bee」が75.9%、「PFUブルーキャッツ」が69.5%、「金沢学院クラブ」が30.2%であった。

しかし、観戦率は認知率に比較して低調であり、「ツエーゲン金沢」で10.3%、「石川ミリオンスタース」で7.2%、「金沢武士団」で3.4%にとどまっている。

今後は、プロスポーツチームの観戦率を高める方策が必要と言えよう。

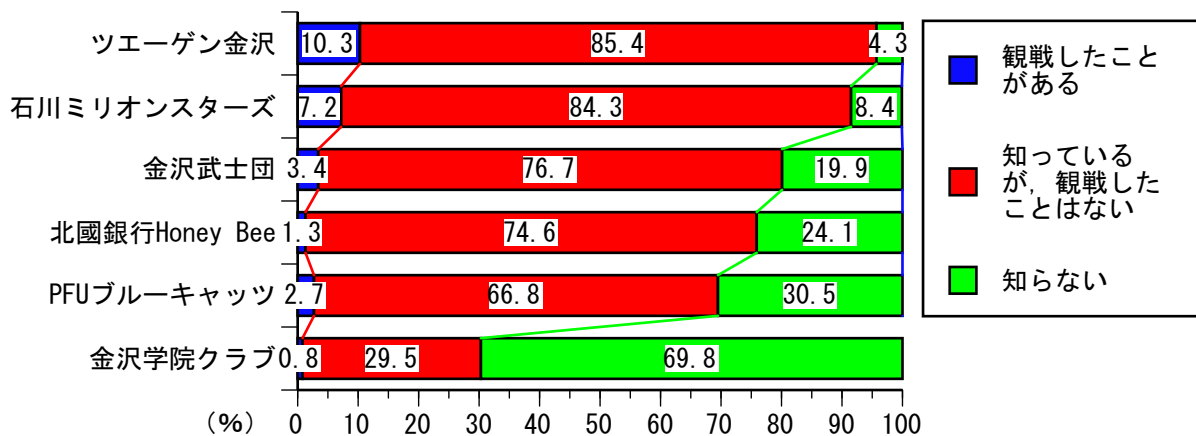


図6. プロスポーツチームの認知率・観戦率（全体）

## 8. 市民スポーツ大会への参加率にも新型コロナの影響が確認される

図7は、金沢市が主催した市民スポーツイベントへの過去3年間の参加率を男女別に示している。図8は、2014年調査の結果を示している。

最も参加率が高いイベントは「金沢マラソン」であり、男性が6.5%女性が6.3%であった。次いで「公民館対抗の各種市民スポーツ大会」が男性で7.5%女性が5.4%、「市民スポーツ大会（市民体育大会）」が男性で4.3%女性が2.5%であった。

一方「この3年間は参加したことがない」は、男性で82.7%女性が85.4%であり、金沢市民のおよそ5人中4人が金沢市主催のスポーツイベントに参加していないことが明らかとなった。

2014年調査の結果と比較すると、「公民館対抗の各種市民スポーツ大会」の参加率が男性では3.0ポイント女性では2.6ポイント低下している。また、「市民スポーツ大会（市民体育大会）」では男性が2.2ポイント、女性が2.8ポイント低下している。「参加したことがない」では、男性で3.3ポイント女性で2.1ポイント増加しており、参加率の低下と不参加者の増加には、新型コロナの影響が表れていると推察される。

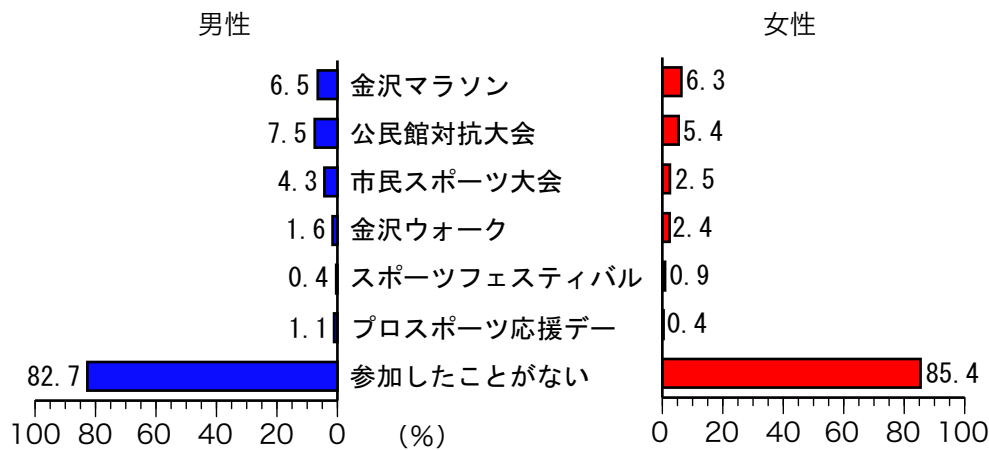


図7. 市民スポーツイベントへの参加率 (2021)

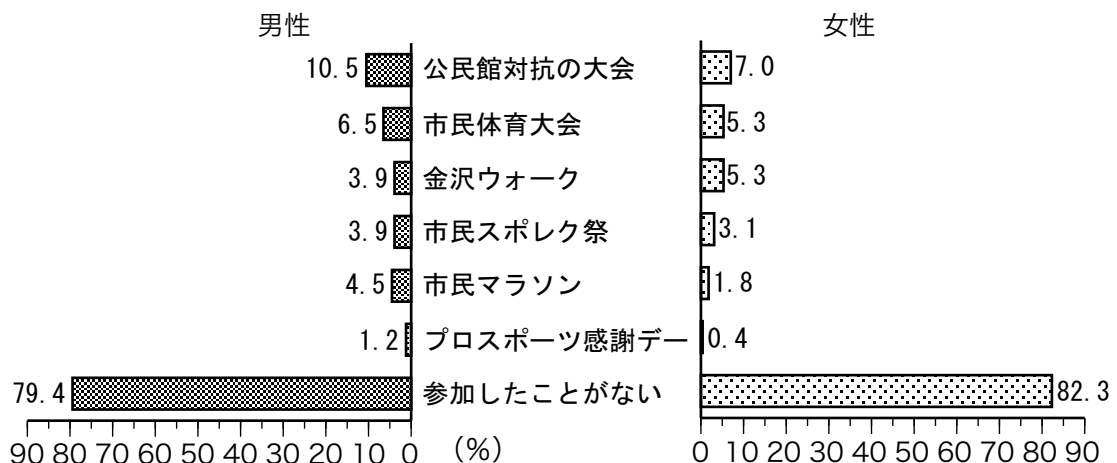


図8. 市民スポーツイベントへの参加率 (2014)

## 9. 金沢市民の5割程度はマラソンに関わっていない

図9は、金沢マラソンへの参加経験と参加希望について、男女別に示している。

これまでの金沢マラソンへの参加経験では、男性は「関わっていない」が最も多く60.5%、次いで「応援者として沿道で声援を送った」が24.3%、「テレビ・ラジオで応援した」が12.6%であった。女性では「関わっていない」が最も多く50.9%、次いで「応援者として沿道で声援を送った」が32.9%、「テレビ・ラジオで応援した」が19.5%であった。

今後の参加希望では、男性は「関わろうとは思わない」が最も多く53.3%、次いで「応援者として沿道で声援を送りたい」が23.4%、「テレビ・ラジオで応援したい」が19.5%であった。女性では「関わろうとは思わない」が最も多く40.6%、次いで「応援者として沿道で声援を送りたい」が37.4%、「テレビ・ラジオで応援したい」が26.8%であった。

参加経験と参加希望を比較してみると、男女とも「テレビ・ラジオで応援したい」が、男性では6.9ポイント、女性では7.3ポイント増加した。「ランナーとして走りたい」では、男性が3.5ポイント、女性が2.8ポイント増加した。また、「関わろうとは思わない」では、男性が7.2ポイント、女性が9.7ポイント減少しており、金沢マラソンへの関わりを拡大しようとする傾向が確認された。

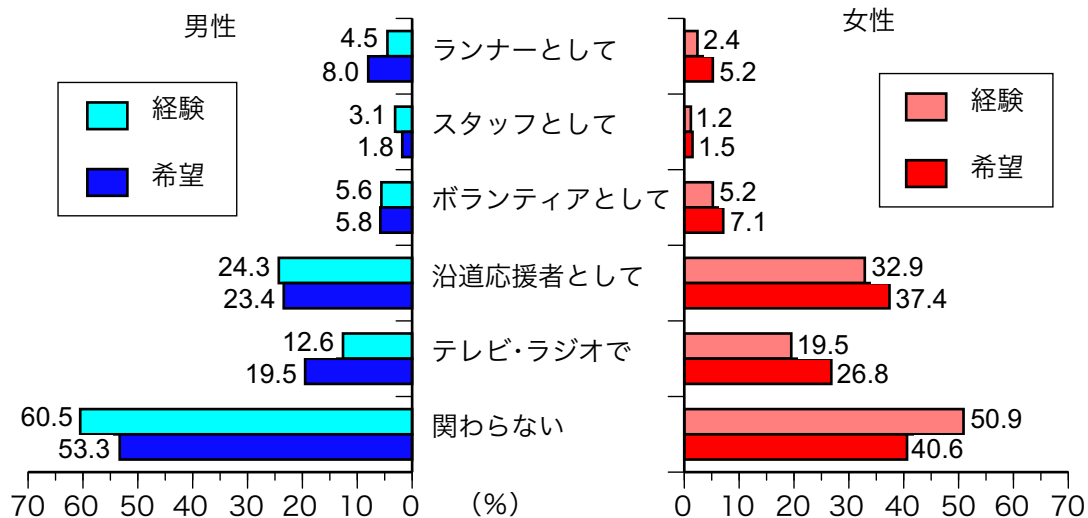


図9. 金沢マラソンへの参加経験と参加希望

## 10. コロナ禍においてストレスを感じる機会が増加した

図10は、新型コロナ発生前と発生後の全体の生活と運動スポーツ実施の変化を示している。

「生活の中でストレスを感じる機会や疲れやすさ」を感じる者の割合が45.6%と高い値を示した。また、「スポーツ実施頻度の減少」が38.4%、「スポーツ実施時間の減少」が37.2%、「スポーツ支出の減少」が27.2%であり、「体重増加」の35.9%と一致する傾向がうかがえた。

図11は、運動スポーツ活動時における新型コロナウイルス感染予防対策を男女別に示している。

男女とも「マスクを着用する」が最も高く、男性で78.2%女性で82.1%であった。次いで「手指を消毒する」は男性が63.9%女性が67.2%、「距離・間隔を空ける」が男性53.7%女性59.2%であった。特にマスクは、外出時において高い着用率であり、マスク習慣がスポーツ場面においても適用されていると推察される。手指消毒や間隔確保についても半数以上が実施しており、複数の対策がとられている解釈される。

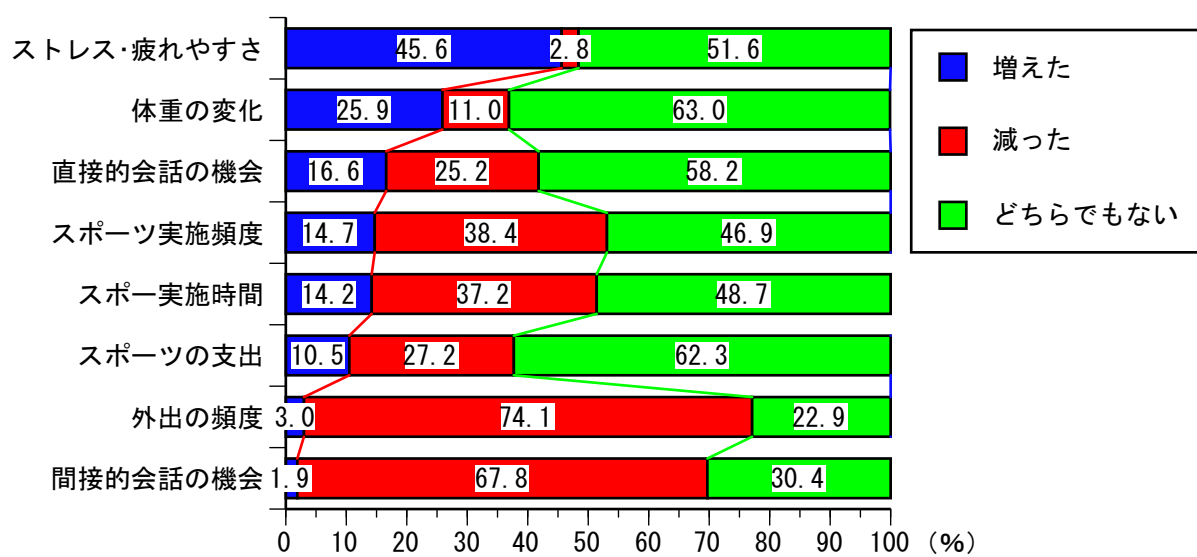


図10. 新型コロナ発生後の生活と運動スポーツ実施の変化

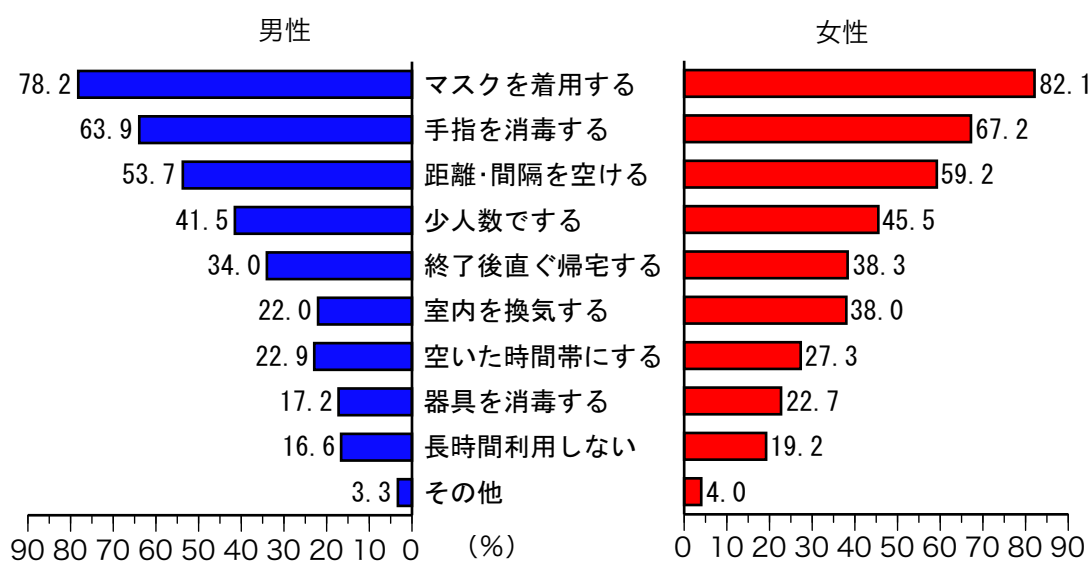


図11. 新型コロナ感染症予防対策

## 11. 自国開催のパラリンピックが障がいのあるなしを考える機会を創出

図12は東京2020オリンピックから受けた影響について、図13は東京2020パラリンピックから受けた影響について、男女別に表している。

オリンピックでは、「日本選手の活躍に感動し日本選手を見たい」が最も高く、男性で52.6%、女性で56.4%であった。次いで「地元選手の活躍に感動し応援したい」が男性で41.5%、女性で50.3%であった。

パラリンピックでは、男女によって傾向が異なった。男性では「日本選手の活躍に感動し日本選手を見たい」が最も高く35.4%であった。女性では「障がいのある選手もない選手もスポーツに変わりがない」が最も高く42.7%であった。次いで「日本選手の活躍に感動し日本選手を見たい」が42.0%、「障がいのある人に優しい社会づくりが大切である」が37.0%、「地元選手の活躍に感動し、応援したい」が34.4%であった。

オリンピックでは、男女ともに日本選手や地元選手の活躍に注目し、スポーツとして楽しみ応援していた。一方で、パラリンピックでは、男性はオリンピック同様にスポーツとして楽しんでいたが、女性は障がいとスポーツの関係について考え、また、障がいのある人にとっての優しい社会づくりが重要であることについて考えていたことが明らかとなった。自国開催祭のパラリンピックにおいて、障がいの有無とスポーツについて考える機会が高まったことは歓迎される結果であると解釈される。

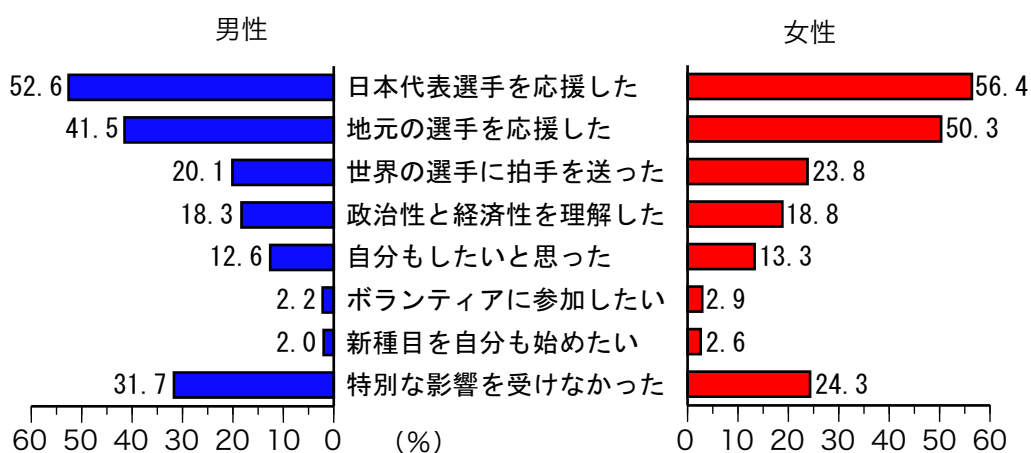


図12. オリンピックから受けた影響

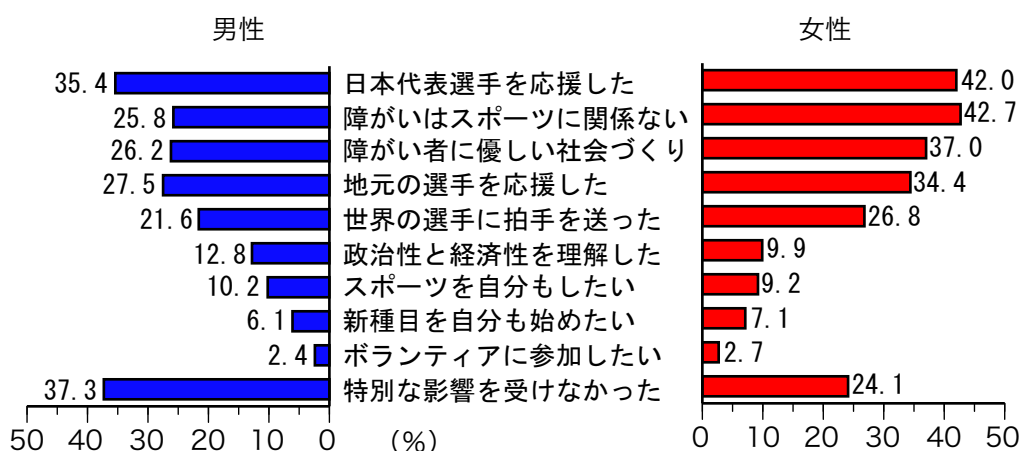


図13. パラリンピックから受けた影響



## 12. 知る・見る・聞く機会の拡大がスポーツの参加しづらさを考えることに繋がる

図14は、障がいのある人や運動スポーツに参加しづらい人に対する重要方策について、男女別に示している。

男女とも「障がいのある人のスポーツについて知る・見る・聞く機会を増やす」が最も高く、男性で54.9%女性で51.6%であった。次いで「障がいのある人が気軽に利用できるスポーツ施設を増やす」が男性で39.9%女性で43.8%、「高齢者が気軽に参加できる運動・健康づくり教室などの数を増やす」が男性で30.4%女性で40.1%であった。これらは男女で概ね同様の傾向が示されたが、第1位を除いては女性の割合がやや高い傾向にあり、女性のほうが関心が高い可能性が示唆された。

運動スポーツに参加しづらい障がい者、子育て中の人、高齢者の三者を比較すると、「スポーツを知る・見る・聞く機会を増やす」では、障がい者が最も高く、次いで高齢者、子育て中の人々の順であった。「スポーツのサポート方法を知る・見る・聞く機会を増やす」では、同じく障がい者、高齢者、子育て中の人々の順であり、運動スポーツに参加しづらい人が誰であるかについては、障がい者への認知が高く、子育て中の人への認知が低いことが明らかとなった。「子育て中の人々が気軽に利用できるスポーツ施設の数を増やす」に注目して男女を比較すると男性が19.8%女性が30.2%であり、女性が10.4ポイント高い結果であり、子育て中の人々のスポーツ参加について、男性の関心が低い可能性が推察された。

また、「コロナ禍でも安心して運動スポーツに参加できるスポーツ実施時の衛生基準をはっきり示す」について、男性で28.8%女性で35.8%を示していることから、運動スポーツに参加しづらい人への配慮の点からもコロナ禍におけるスポーツ実施時の衛生基準を示すことが重要であると解釈される。

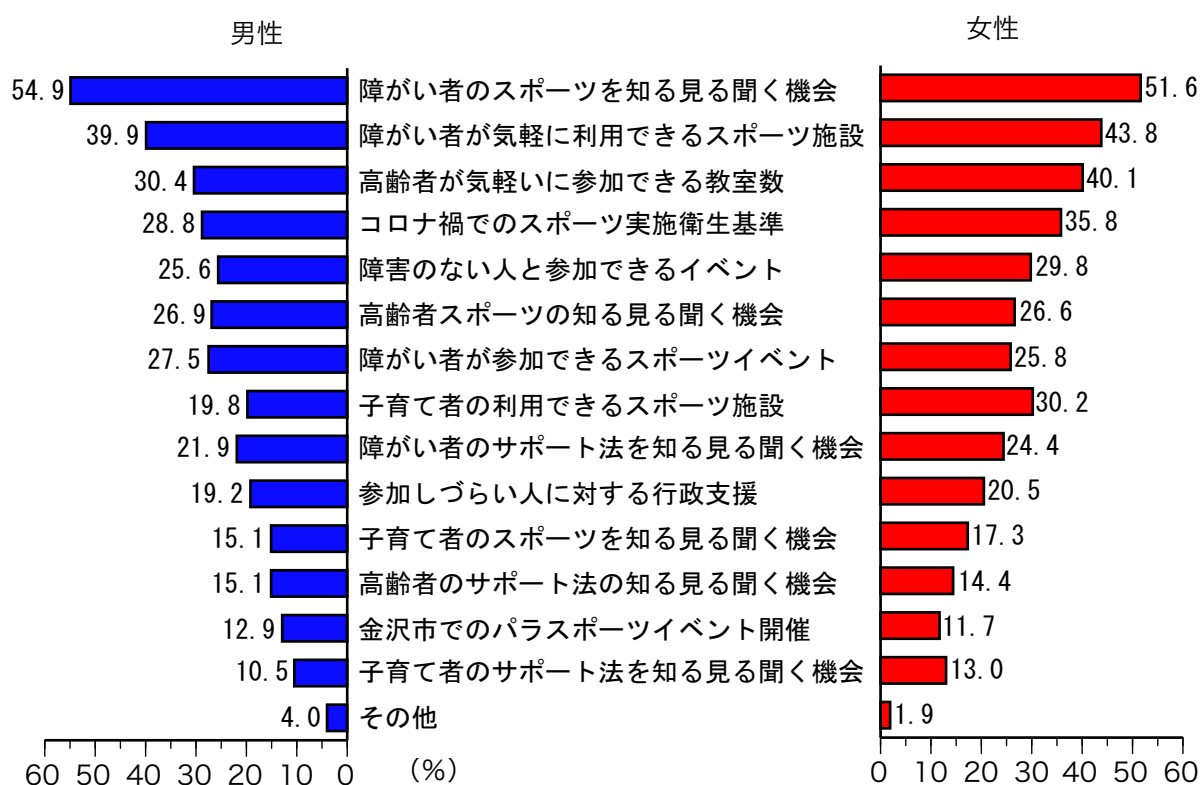


図14. スポーツへの参加しづらさを改善するための方策

### 13. 施設の建設希望率は低下し、「スポーツ施設は足りている」と回答

図15は金沢市民が建設を希望するスポーツ施設について、男女別に表している。図16は2014年調査、図17は2009年調査の結果である。

希望する施設の第1位は「ウォーキングコース」であり、男性が19.8%女性が27.4%であった。第2位は「サイクリングコース」、第3位は「障がいのある人が利用できるスポーツ施設」、第4位は「多目的運動広場」、第5位は「プール」であった。市民の5人に1人が希望する施設はウォーキングコースだけであることが明らかとなった。一方「スポーツ施設は足りている」と回答した者は男性で30.8%女性で26.2%であった。この値は、第1位の「ウォーキングコース」の値を上回っており、金沢市民が建設を希求するスポーツ専用施設は今回の調査では確認できなかったと理解される。

第1位の「ウォーキングコース」は、前々回調査、前回調査においても第1位であり、その値が40%程度と高かったことから比べれば、20%程度減少する結果となった。次の2つの理由が考えられる。第一は、金沢市内に多数あるウォーキングコースが市民に広く認知されるようになり、ウォーキングコース建設の希望率が低下した。第二は、コロナ禍という運動スポーツの停滞状況が、金沢市民のスポーツ実施意欲を低下させ、その結果スポーツ施設の建設希望が低下傾向となった。ウォーキングコースばかりでなく、その他のスポーツ施設についての希望率も低下していることから、第二の理由が有力かもしれない。

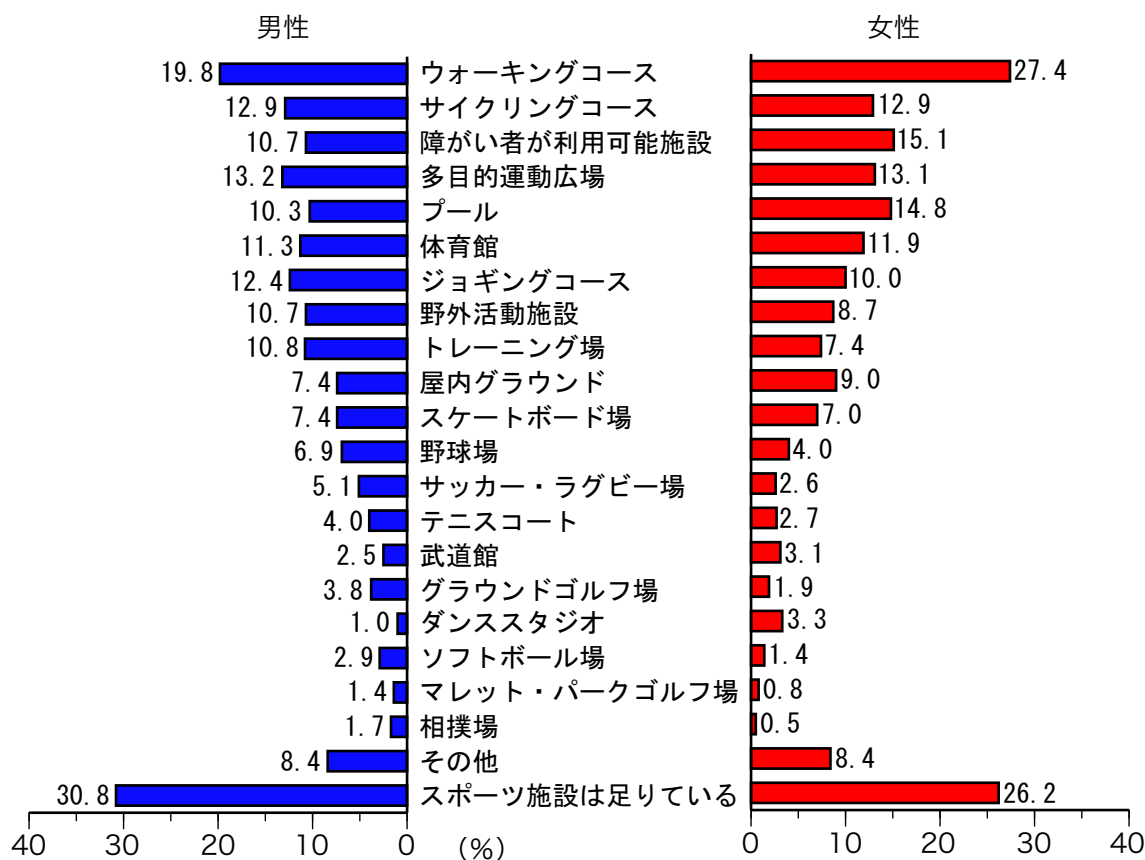


図15. 市民が建設を期待する運動・スポーツ施設 (2021年調査)

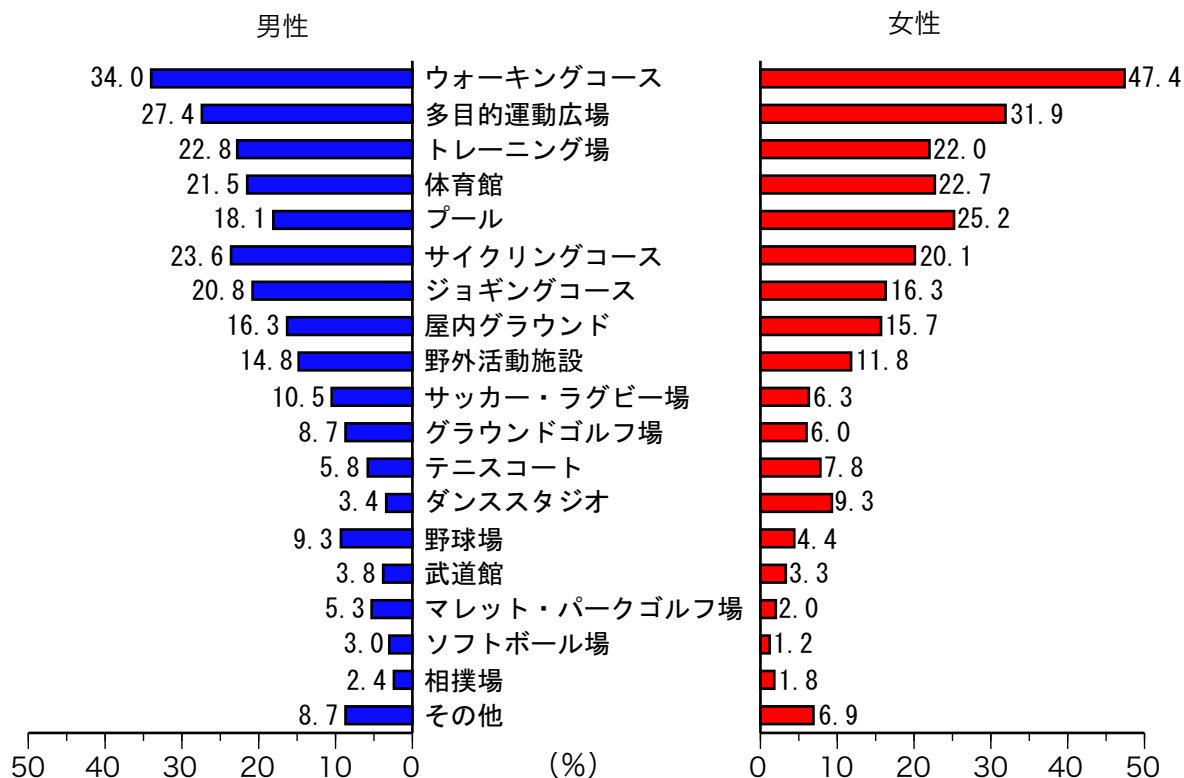


図16. 市民が建設を期待する運動・スポーツ施設 (2014年調査)

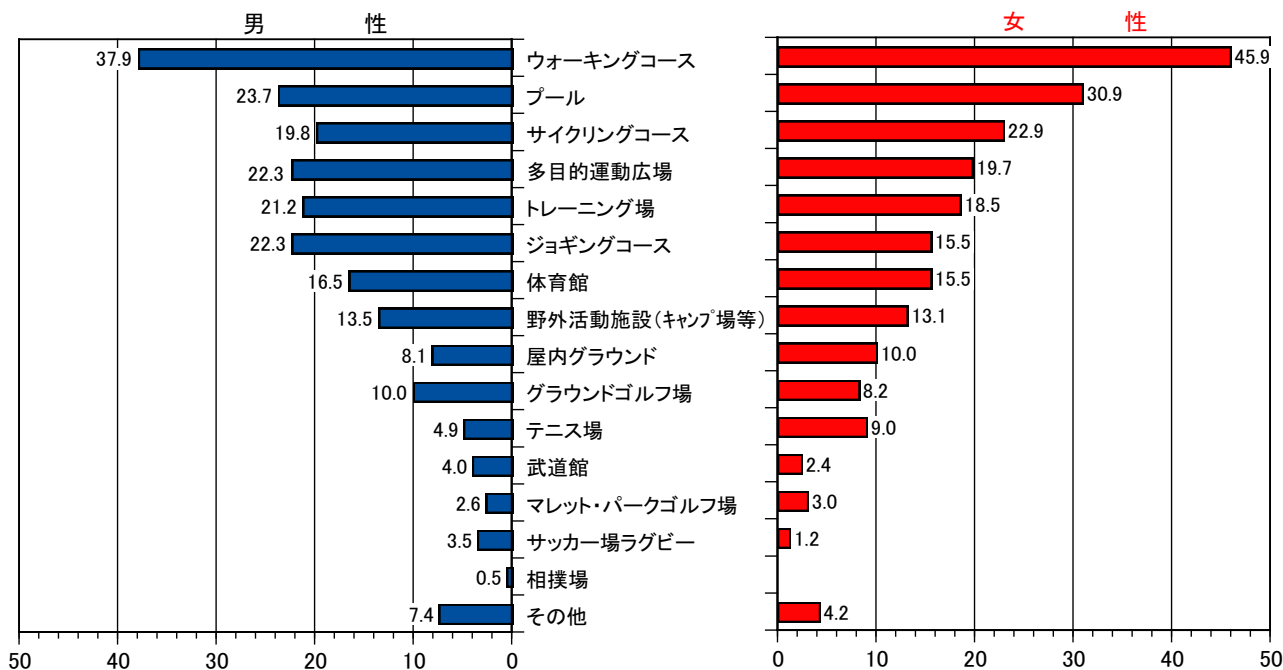


図17. 市民が建設を期待する運動・スポーツ施設 (2009年調査)